

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 馬淵 美帆

本論文はわが国近世絵画を中心に、図様の転用という現象の諸相を分析し、その意味について考察したものである。おもに取り上げられる作品は、豊かな風俗表現を伴う三つの有名な作品、つまり16世紀の歴博乙本「洛中洛外図屏風」(国立歴史民俗博物館蔵)および狩野秀頼筆「高雄観楓図屏風」(東京国立博物館蔵)、18世紀の円山応挙筆「難福図巻」(相国寺承天閣美術館蔵)である。その結果、ある作品に見られる図様が他の作品に継承転用される場合、さまざまな異なるレベルの存在が明らかとなった。本論文のとくに優れたところとして、以下の三点を挙げることができる。

第一に堅固な理論性によって構築されている点である。三点の代表的作品をそれぞれ最もふさわしい観点から分析した論文でありながら、一つの有機体としてまとめ、充実した読後感に誘われるのは、ひとえにしっかりした論理性のゆえである。この点で決定的役割を果たしているのは第一章である。論者はさまざまなジャンルの作品に転用されることの多い絵巻の風俗表現に着目し、言説性と形象性によって絵画をとらえる記号論の手法を援用する。その上で個々の事物を単位とした絵画的な記号の分類を行ない、絵巻における風俗表現の構造を図様の明示的意味と暗示的意味により分析する。そして言説と形象の観点から「風俗画」に対して新しい定義づけを行なっている。このような明快な理論に準拠して、第二章以下の考察が進められ、最後に転用元作品の時代、種類、所在からの距離という三要素によって、八つの理論的なパターンに分類される。

第二に豊かな独創性と新鮮な新知見に富む点である。図様転用の問題をこのように分析すること自体、いままでほとんどの研究者が思いつかなかった方法論なのだが、個々の作品に関し指摘された新事実には、目から鱗が落ちる思いのするものが多い。例えば歴博乙本では、細部における図様の継承に焦点を当て、特徴的な樹法や建築描写を取り上げる。これらを元信、松栄、永徳、宗秀各工房による洛中洛外図諸本と比較検討し、宗秀本とのみ共通することを見出す。歴史的考察を加え、歴博乙本が宗秀工房で制作された可能性を導き出す。さらに筆者や制作年代についても新たな推定が提出される。これらはむしろ伝統的美術史学の研究目的ともいえるが、この点においても論者がしっかりした訓練を経ていることを物語る。これらがおのずと粉本に強く依拠して再生産する歴博乙本の制作姿勢を証明し、所期の研究目的へと収斂していくのである。

第三に緻密な実証と鋭利な分析である。これによって第一、第二の点が補強され、反論の余地をほとんど残さぬ重厚な論文に仕上がる結果となった。例えばもつとも力こもる「難福図巻」の分析では、応挙および依頼主祐常門主の下絵を詳細に検討、本図巻の構想と制作の実体を白日のもとにさらしている。難の巻には聖衆来迎寺の「六道絵」や「鳥獸戯画」など、福の巻には「酒飯論」や「信貴山縁起絵巻」などから、個々の図様のみならず構図まで借用がみられるという新たな指摘も、きわめて強い実証性を伴っている。難の巻を六道絵や地獄絵の伝統につなげ、福の巻に理想性を付加する役割を古画の利用に求めるのも、鋭い分析の結果である。とくに刑罰の図について分かりやすい普遍的なものに変えていること、祐常による難の巻の構想が『観音経』と密接に関係することなど、すべて確実な証明と分析により強い説得力を獲得している。

本論文には今後の考察にまつべき部分もないではないが、日本絵画における図様の転用について独創的見解をもたらし、それを実証し、研究水準をさらに高めたものである。

よって本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと判定した。